

昭君

禪竹作

前

ワキ

里人

シテ（父）白桃

シテ

（父）

白桃

ツレ（母）王母

ツレ

（母）

王母

後

シテ

王昭君

シテ

王昭君

季は地は
春 唐土

季は地は
春 唐土

「是は唐かうほの里に住居する者にて候。さても此所に白桃王母と申す夫婦の候ふが。一人の息女を持つ。其名を昭君と名づく。帝に召されて御寵愛限りなかりし所に。さる子細あつて胡国へ移されて候。夫婦の人の歎きたゞ世の常ならず。近所の事に候ふ程に。立ち越えとぶらはゞやと思ひ候。

シテ、ツレ一声
「散りかゝる。花の木陰に立ち寄れば。空に知られぬ雪ぞ降る。

シテサシ
「是は唐かうほの里に住居する。白桃王母と申す。

二人
「夫婦の者にて候ふなり。

ツレ
「かほどに賤しき身なれども。美名を顯はず娘あり。

二人
「昭君と彼を名づけつゝ。容顔人に勝れたり。されば帝都に召されて後。明妃と其名を改めて。天子にまみえおはします。

シテ
「かほどいみじき身なれども。猶も前世の宿縁。離

れやらざる故やらん。

二人 「諸人の中に撰ばれて。胡国の民に移され。漢宮万里の外にして。見馴れぬ方の旅の空。思ひやるこそ悲しけれ。

シテ 「されども供奉の官人ども。旅行の道の慰めに。絃管の数を奏しつゝ。

二人 「馬上に琵琶を弾く事も。此時よりと聞く物を。
下歌地 「画図にうつせる面影も。今こそ思ひ知られたれ。

上歌 「彼昭君の黛は。く。緑の色に匂ひしも。春や暮るらん糸柳の。思ひ乱るゝ折毎に。風もろともに立ち寄りて。木陰の塵を掃はん。く。

シテ 「いざく庭を清めんと。祖父は箒を携へたり。

ツレ 「實にや心も昔の春。老の姿もさゝがにの。いと苦しことは思へども。風結ぶ涙の袖の玉襷。斯かる思ひも子故なり。

シテ 「唯世の常の賤の男と。人もや見るらん恥かしや。

ツレ 「日は山の端に入相の。

シテ 「兼ねて知らする夕嵐。

ツレ 「袖寒しとは思へども。

シテ 「子の為なれば。

ツレ 「寒からず。

二人次第 「落葉の積る木陰にや。嵐も塵となりぬらん。

下歌地 「落葉の積る木陰にや。く。嵐も塵となりぬらん。

上歌 「実に世の中に憂き事の。く。心に懸かる塵の身

は。掃ひもあへぬ袖の露。涙の数や積るらん。風
に散り。水には浮ぶ落葉をも。暫し袖に宿さん。
下歌 「涙の露の月の影。それかと見ればさもあらで。小
簾の上の玉霰。音もさだかに聞えず。

シテ詞 「余りに苦しう候ふ程に。休まばやと思ひ候。

ワキ詞 「いかに此屋の内に白桃の渡り候ふか。

シテ 「誰にて御入り候ふぞ。

ワキ 「いや某が参りて候。

シテ
「此方へ御出で候へ。

ワキ
「如何に申し候。 さても昭君の御事御心中察し申して候。

シテ
「御とぶらひ有難う候。

ワキ
「又申すべき事の候。此柳の木の本を立ち去らずして清め給ふは。何と申したる御事にて候ふぞ。

シテ
「昭君胡国へ移されし時。此柳を植ゑ置き。我胡国にて空しくならば。此柳も枯れうずると申しつる

が。御覽候へ早片枝の枯れて候。

ワキ
「実にく御歎き尤にて候。さてく昭君は何しに胡国へは移され給ひ候ふぞ。

シテクリ
「さても昭君胡国に移されし。其いにしへを尋ぬるに。

地
「天下を治めし始めなり。

シテサシ
「然れば胡国の軍強うして。従ふ事期し難し。

地
「されば互に和睦して。其しるし一つなからんやと

て。美人を一人遣はすべき。御約束の有りしに。

クセ

「そもそも漢王の宣旨には。三千人の寵愛。何れを分く

る方なし。もろくの宮女の。紅色高位の姿を。

賢聖の障子に。似せ画に是を顯はし。中に劣れる

様あらば。即ち彼を撰びて。胡国の為めに遣はし。

天下の運を静めんと。綸言ならせ給へば。数々の宮女たち。是を如何にと悲しみ。画かける人を語らひ。皆賂を贈りつゝ。御約束の有りし故。

シテ
「されば写せる其姿。

地
「何れを見るも妙にして。柳髪風にたをやかに。桃顔露を含んで。色猶深き姿なり。中にも昭君は。ならぶ方なき美人にて。帝の覚えたりしなり。それを頼める故やらん。たゞ打ち解けて有りしに。画図に写せる面影の。あまり賤しく見えしかば。さこそは寵愛。甚しきとは申せども。君子に私の。言葉なしとや思しけん。力なくして昭君を。胡国

に贈り遣はさる。

シテ詞

「昔し桃葉といひし人。 仙女と契浅からざりしに。
仙女空しくなりて後。 桃の花を鏡に写せば。 即ち
仙女の姿見えけるとなり。 此柳もさながら昭君の
姿。 いざさせ給へ鏡に写して影を見ん。

ツレ 「それは仙女の姿なり。 いかで是には喻ふべき。

シテ 「いやそれのみならず鏡には。 恋しき人の写るなり。
ツレ 「夢の姿を写しゝは。

シテ 「しんやうが持ちし増鏡。

ツレ 「故郷を鏡に写しゝは。

シテ 「とけつといひし旅人なり。

ツレ 「それは昔に年を経て。

シテ 「花の鏡となる水は。

地 「散りかかる花や曇るらん。 思はいとゞ増鏡。 若も
姿を見るやと。 鏡に向つて泣き居たり。 く。 (中入)

昭君 「是は胡国に移されし。 王昭君の幽靈なり。 さても

父母別れを悲しみ。春の柳の木の本に。泣き悲しみ給ふ痛はしさよ。急ぎ鏡に影を写し。父母に姿を見え申さん。春の夜の。朧月夜に顯はれて。

地「曇りながらも影見えん。

「恐ろしや鬼とやいはん面影の。身の毛もよだつばかりなり。いかなる人にてましませば。鏡には写り給ふらん。

「是は胡國の夷の大將。後ジテ呼韓邪單于が幽靈なり。

「胡國の夷は人間なり。今見る姿は人ならず。目には見ねども音に聞く。冥途の鬼か恐ろしや。

「呼韓邪單于も空しくなる。同じく昭君が父母に。対面の為に來りたり。

「よしなかりける対面かな。姿を見るも恐ろしや。シテ詞「そもそも恐るべき謂はいかに。

「心に知らぬ我姿。鏡に寄りて見給へとよ。

シテ「いとく鏡に影を写さん。誠に気疎き姿かと。鏡

に立ち寄りよくく見れば。恐れ給ふもあら道理や。

地「荆棘をいたゞく髪筋は。く。

シテ「主を離れて空に立ち。

地「元結さらには溜らねば。

シテ「さねかづらにて結び下げる。

地「耳には鎖を下げたれば。

シテ「鬼神と見給ふ。

地「姿も恥かし。鏡に寄り添ひ立つても居ても。鬼とは見れども人とは見えず。其身かあらぬか我ならば。恐ろしかりける顔つきかな。面目なしとて立ち帰る。

地「唯昭君の黛は。く。柳の色に異ならず。罪を顯はす淨玻瓈は。それも隠れはよもあらじ。花かと見えて曇る日は。上の空なる物思ひ。影もほのかに三日月の。曇らぬ人の心こそ。誠を写す鏡なれ。

。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第九輯』 大和田建樹 著